

図書館 だより

30

甲子園大学図書館

2025年3月24日発行

「本を読む」ということ

副学長 安村直己

「図書館だより」の冒頭言を依頼されたが、残念ながら、それにふさわしいような立派な文章を書くことは、私にはできそうにないので、「本を読む」ということについて、私の個人的な記憶や経験を思い浮かぶままに書いてみたい。

恥ずかしながら、私は子どもの頃はあまり本を読む子どもではなかった。幼い頃の記憶はひどくあいまいで、定かなことは言えないが、本がそれほど面白いと思うこともなかったように思う。

今になって思うと、私は自分の心の中で、いろいろな空想をふくらませながらひとり遊びをすることが好きで、本という自分の外側の世界にあるファンタジーや物語には、余り関心がなかったような気がする。それは他人の心の世界の物語で、人ごとのように思えたのかもしれない。それはそれで、当時は別になんの問題にもならなかった。

しかし、この子どもの頃からあまり本を読んでこなかったという私の自意識は

その後どうも私の「本コンプレックス」になったようである。

私は、読書好きの友人に劣等感を感じた。電車の中でかじりついて本を読んでいる子どもを見ると、やけに尊敬してしまう。その一方で、本を読むということは、それほどに立派なことなのかという反発する気持ちも出てきて、自分の中で尊敬や憧れと反発心という矛盾した思いが錯綜し、モヤモヤしてくるのである。これをコンプレックスと言わずして何であらう。

大学に入ってから、私はこのコンプレックスを克服しようと、毎日、授業のない時間は、大学の図書館に通い、これまで読んでいなかった夏目漱石や川端康成、太宰治、谷崎潤一郎といった有名な文学作品を読了する試みに挑戦した。それらの作品は難解で、余り理解できなかったが、読んだという事実が大切だった。それでもこれは、私の本コンプレックスの解消に少しはつながったようだった。

文学作品に少し親しんだので、少し気が楽になり、ジャンルに関係なく、自分の興味を引いた小説やエッセイを自由に読み出した。それらはとても面白かった。

しかし、ここでもやはり問題になったのは、所謂「本を読む」ことをめぐる「強迫観念」だった。ひとつの作品を読み始めると、最後まできちんと理解し、読み終わらなければいけないという強迫である。途中でやめることは許されない。あるいは、文意を全部理解するために、一行も一文字も読み飛ばしてはいけないと常に気を張ってしまう。世の中には斜め読みということがあらしいが、私にはその意味がまったく分からなかった。

大学で臨床心理学を専攻してからは、心理学関係の専門書を盛んに読むようになった。なによりも私は臨床心理学に尽きせぬ興味があったので、関係する文献は夢中で読んでいた。これまで自己目的化していた「本を読む」という行為は、ここに来て、知りたい世界を知るための重要な「手段」となった。父が教育畑で教育相談の仕事をしていたので、家には河合隼雄先生のカウンセリグの本がたくさんあった。それらも片っ端から引っ張り出して読んでいた。

その頃の私には、専門書の読み方にひとつの方針のようなものができていた。理解することが難しい部分は横に置き、スルーしておいて、今の自分でも理解できる部分を中心にして読み進める。分かるところを大切に味わって読んでいく、という読み方である。

今、読んでも分からないところは、まだ

自分の経験が足りないから分からないのであって、もう少し年をとって再読すれば分かるかもしれない。そう思って、分からないところはそのままにしておく。将来、自分の経験が増えて、分かるときが来るまで待つのである。それはそれでまた楽しみでもあった。実際、以前は分からなかったところが時を経て読み返すと、しみじみと分かることも多かった。

そして今、私は臨床心理学以外に、宗教に強く関心を持つようになり、主に仏教や禅に関する書物を読み続けている。それはそれは面白くてたまらない。自分がこれまで知らなかったことばかりなので、それを知る喜びと新鮮な感動がある。

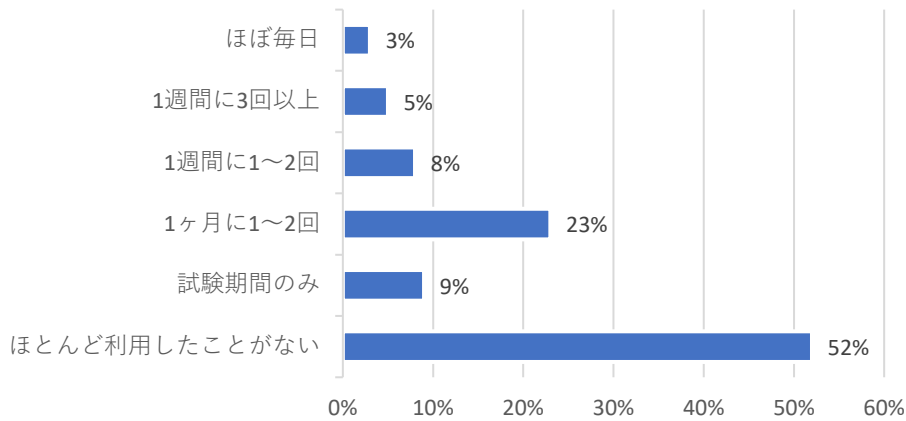
例えば、親鸞について読めば読むほど、分からないことが出てくる。今は逆にそれが面白い。分からないから余計に未知の世界、未踏の境地にひかれる自分がいる。

この頃、「本を読む」ことの強迫もこだわりも無くなってきた気がする。すべてが分かることなどありはしない。むしろ、この頃は、これは簡単には分からないということが、よく分かるようになった。よく分からないことの豊かさというものがある。だから、いつまでも本に触れ続け、考え続けていたい。読了することも意識しなくなった。そもそも、ものごとに完了などないのである。

ともかく、分からないから面白い。この年になって、分からないことを楽しんでいえるような気がする。人生とは、そういうものかもしれない。

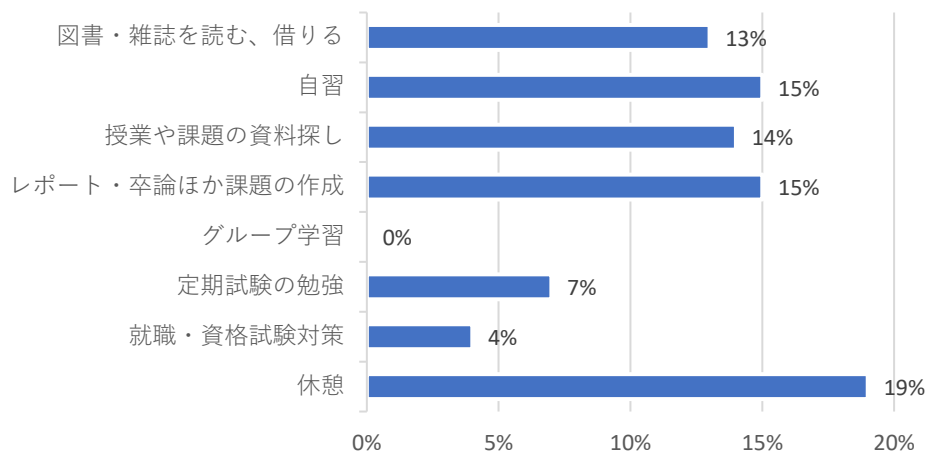
2024年度 大学図書館アンケート結果 ～学生生活実態調査より～

図書館をどのくらい利用しますか？



ほとんど利用したことがないと回答した学生が半数を超えたため、利用を促す工夫が必要である

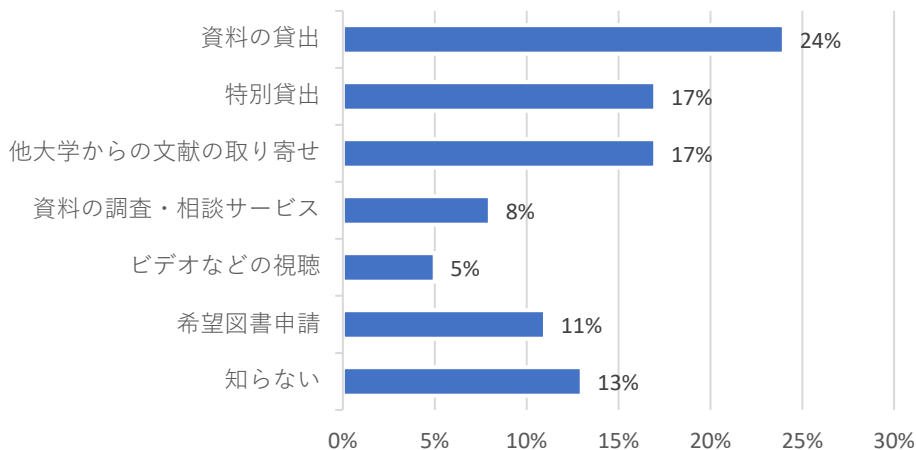
あなたが図書館を利用する主な目的は何ですか？



傾向は昨年から大きな変化はなし

グループ学習より個別で勉強したい傾向が見られる

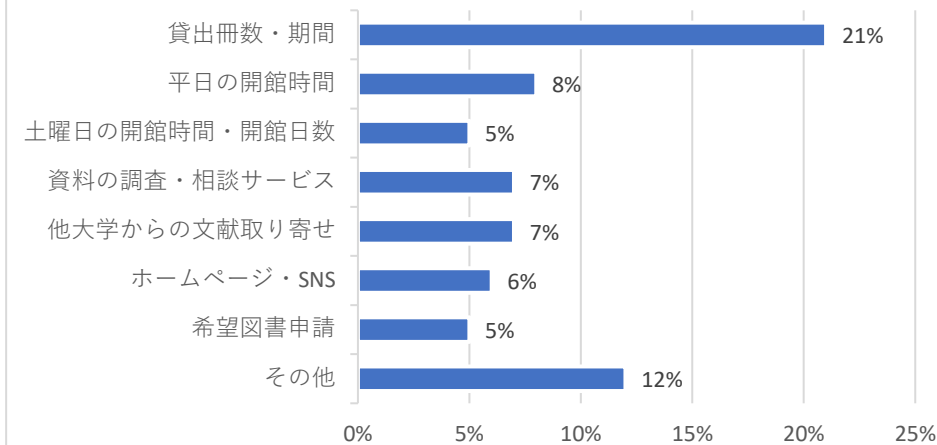
図書館が提供するサービスをご存知ですか？



昨年から大きな変化はなし

図書館サービスを知らない学生が増加しているため引き続き周知に努める必要がある

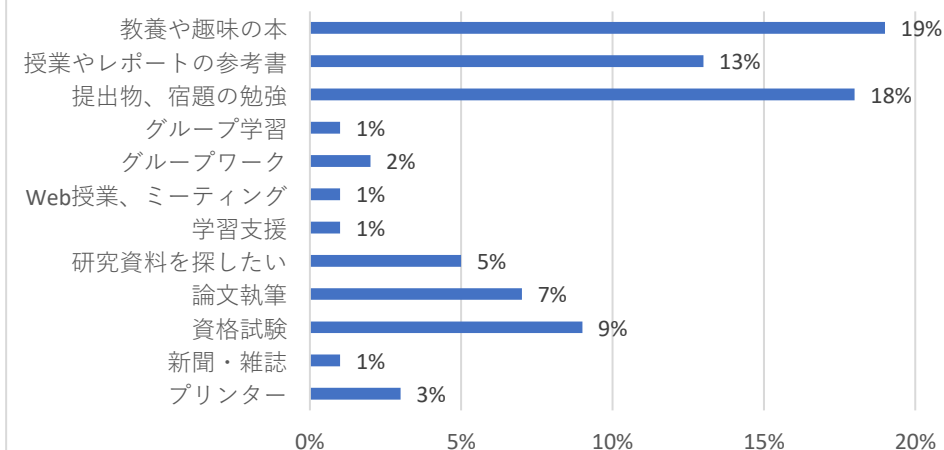
充実させてほしい図書館のサービスは？



貸出冊数の増加や
貸出期間の延長と
いったサービスへ
のニーズが高い

調査・相談サービ
ス、文献取り寄せ
に対するニーズも
見られる

利用するとしたらどのようなことをしたいですか？



教養や趣味の本を
読みたいという
ニーズが昨年同様
高い

提出物や宿題の
勉強をしたいと
いう要望も強い

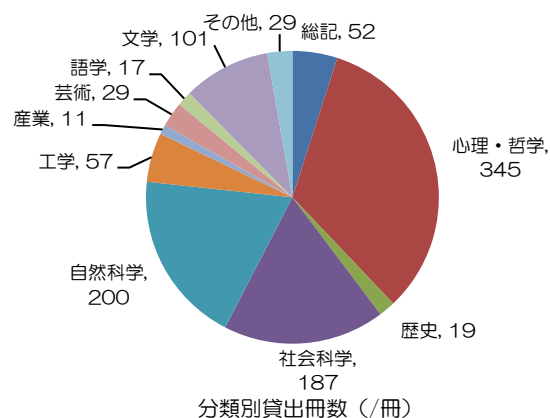
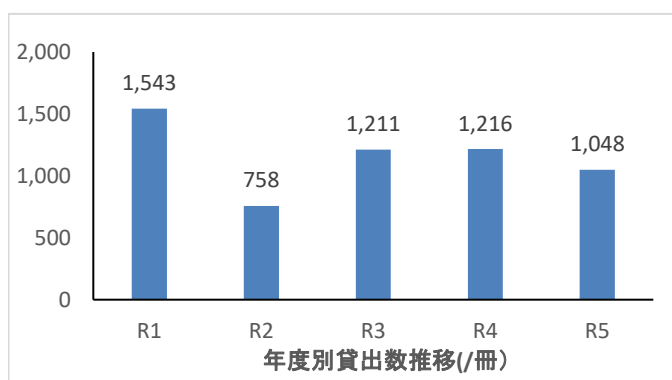
<その他の回答>

- ・マンガを読みたいです。小説を増やしてほしい。
⇒大学図書館では、学生の学習に関する資料を中心に蔵書を構成しています。
学生の購入希望は随時受付し、購入を検討しています。
また、学生が書店で蔵書を選ぶ選書ツアーも実施しています。
- ・2週間借りられるようにしてほしい。
⇒貸出期限の更新を行っています。更新したい資料をカウンターにお持ちください。
- ・図書館の資料を無料でコピーしたい。
⇒大学内では無料で資料をコピーすることはできません。ご了承ください。

大学図書館では、資料に関する相談を随時受付しています。
資料や利用方法について何か分からないことがあれば、相談してください。

2023年度図書館利用統計

開館日数	平日：236日 土日：9日 合計：245日
入館者数（学内/学外）	学内：12,965名 学外：108名 合計：13,073名 (53.4名/日)
貸出冊数	累計：1,048冊（年度推移、分類別貸出冊数は下記グラフ参照）
学外相互協力（ILL）（依頼/受付）	〔図書〕 受付：4件 依頼：18件 〔複写〕 受付：86件 依頼：158件
蔵書冊数	図書蔵書数：128,945冊 雑誌契約数：48タイトル（和：42 洋：6）
電子ジャーナル・データベース数	電子ジャーナル：5 データベース：1



【図書館を活用しよう！】 他大学などからの文献取り寄せ方法

- ① 図書館OPACの詳細検索で検索（検索対象でNII CiNii Booksにも☑）
- ② 「図書館間相互利用申込書」に資料の情報を記入する（※用紙は貸出・返却カウンターにあります）

記入例

※ 論文の場合

図書館間相互利用申込書 (複写・貸借)					
所属	栄・心	学籍番号	***	受付年月日	* 年 * 月 - 日
氏名	甲子園 花子		身分	教員・院生・学生・その他 ()	
誌名 (書名・出版社)	家族心理学研究				
巻号	28(2)	頁	120 ~ 135	刊年	2015
著者	大山寧寧				
論題	喪失体験からの回復過程における家族レジリエンス要因				
支払	公費・私費・その他 ()				
連絡先 (メールアドレス)	***** @ ps.koshien.ac.jp				

複写料・
郵送料が
必要です

書名・雑誌名を
記入

論文名を記入

必ず連絡がつく
連絡先を記入して
ください

- ③ 図書館の窓口で申込書を提出（メールでも受付しています）
- ④ 文献の受け取り・資料の貸出（資料の到着は約1週間が目安です）

第4回 学生選書ツアー

学生選書ツアーは、図書館に所蔵してほしい本を学生が書店で選ぶイベントです。今年度は11月8日と12日にジュンク堂書店西宮店で開催しました。

今回参加したのは、栄養学部の学生2名と心理学部の学生1名、心理学研究科の院生4名です。

学生・院生は皆、悩みながらも楽しんで本を選んでいました。

学生・院生が選んだ本

- 『心の傷を癒すということ』
- 『気まぐれな夜食カフェ』
- 『子どもの発達検査の取り方・活かし方』など



第7回 図書館POP大賞

図書館POP大賞は、学生が好きな本をPOPで表現するイベントで、学生の読書推進と図書館利用の促進を目的に毎年開催しています。

各受賞作品は、学生・教職員の投票と図書館委員の最終審査によって選ばれます。

今年の最優秀賞は、古田愛恵さん(フードデザイン学科4回生)の『かがみの孤城』でした。各受賞作品は大学図書館ロビーで見ることができます。ぜひご覧ください。



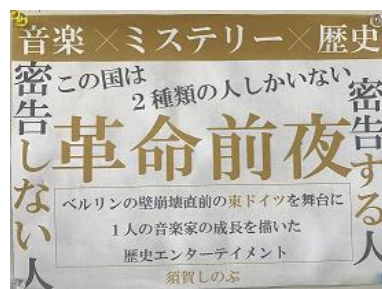
表彰式



最優秀賞



優秀賞



特別賞